介 護 職 員 自 己 評 価 表

2024年8月15日

事業所名	定期巡回・随時対応型訪問介護看護きいれ （日常的・継続的な医学管理担当チーム）

	正社員	非常勤社員
介護支援専門員	1人	
認定特定行為業務従事者	6人	1人
介護福祉士	6人	1人
実務者･初任者研修	人	
看護師	3人	2人

※複数資格者含む

◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よく できている	なんとか できている	あまり できていない	ほとんど できていない	備　考
前回の課題に関する改善	3.0%	65.2%	19.7%	12.1%	

前回の改善計画

利用者は在宅だけでなく、居住系施設や共同住宅で暮らしている。これまで居住系施設で暮らす利用者はコロナ禍から接触が制限され、感染対策の徹底から支援は限定されたてきたが、５類移行後は従来の生活を取り戻しつつある。なかでも居住系施設で暮らす日常的・継続的な医学管理が必要な重度要介護者では、日常の健康状態をご家族に連携し、ご家族と協働したケアが提供できるようになった。利用者の重度化にあわせて全介助が増え、介護スタッフの負担は増えている。腰痛予防として二人介助を増やすことを計画した。

前回の改善計画に対する取組み結果

利用者の重度化にあわせて二人介助を増やし腰痛予防を図った。拘縮のある全介助の利用者は二人介助でケアをおこなっているが、人的な制限もあり全ての全介助者に提供するには課題が残った。スタッフ教育は、若手スタッフに負担感があり、経験の長いスタッフが指導を担当しているが、スタッフ間のコミュニケーション不足から、抜本的な解決にはつながらなかった。課題は若手スタッフ自身がストレスになっていることを自覚しておらず、ミーティングなどで対応できないことであった。言語化でき難いストレスや不安に対して負担に寄り添える仕組みを検討する必要があった。

◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)		よく できている (60以上)	なんとか できている (50～59)	あまり できていない (40～49)	ほとんど できていない (39以下)	合　計
SECTION　1	対象者の接し方や態度について	0.0%	66.7%	16.7%	16.7%	100%
SECTION　2	仕事上の態度について	0.0%	66.7%	33.3%	0.0%	100%
SECTION　3	食事について	0.0%	66.7%	33.3%	0.0%	100%
SECTION　4	移乗や移動について	0.0%	66.7%	16.7%	16.7%	100%
SECTION　5	排泄について	0.0%	83.3%	0.0%	16.7%	100%
SECTION　6	入浴について	0.0%	83.3%	0.0%	16.7%	100%
SECTION　7	着替えや整容について	0.0%	66.7%	16.7%	16.7%	100%
SECTION　8	服薬について	0.0%	66.7%	16.7%	16.7%	100%
SECTION　9	意思疎通について	0.0%	66.7%	33.3%	0.0%	100%
SECTION　10	行動障害について	16.7%	33.3%	33.3%	16.7%	100%
SECTION　11	普通の生活やアクティビティについて	16.7%	50.0%	16.7%	16.7%	100%

自己評価及び改善が必要な事項

利用者の重度化が著しく、二人介助を増やすなど腰痛予防を図っているが、人的な制限もあり全ての全介助者には対応できていない。利用者数だけでなく二人介助を含めた業務量の調整やほか事業所との連携を検討すべきであった。特に、若手スタッフの負担感は強く、経験の長いスタッフが指導を兼ねて二人介助を一緒におこなっているが、兼ねてからのスタッフ間のコミュニケーション不足もあり、抜本的な解決には課題が残った。原因のひとつに、若手スタッフ自身がストレスになっていること自体を自覚しておらず、負担や不安が過度になり心身に支障を来たすスタッフがみられた。スタッフの睡眠状態や食欲等からストレスや不安、或いは、その程度を判断する必要があった。これらのストレスや不安の解消を図る仕組みを検討している。

主任 畠田美香

外部評価者

定期巡回・随時対応型訪問介護は、定期の巡回ケアにあわせて随時ケアを提供する介護・看護ケアを24時間対応するサービスです。こちらの事業所は、日常的・継続的な医学管理が必要となる重度要介護者が多く、医療連携の重要性は高いといえます。日常の健康管理として、家族同意を得たうえで利用者のバイタルデータを連携医療機関と常時共有する仕組みを備えていました。しっかりとした情報の連携体制はケアマネとも構築され、医師や看護師等への素早い連携は家族からの信頼も得ているようです。訪問リハビリの利用者も多く、リハビリスタッフとの連携や合同のカンファレンスにより情報連携に基づくケアを提供していました。一方、全介助の利用者が多いだけに、介護スタッフの腰痛予防を検討する必要がありそうです。二人介助を増やすなどの対策を講じていましたが、人的な制限もあり課題も残されていました。利用者数にくわえて業務量の調整やバックアップ体制についても検討すべきかもしれません。スタッフ教育は、経験の長いベテランスタッフが中心となって若手スタッフの教育をおこなっていました。二次評価より自己評価が低いスタッフが若手スタッフで確認され、ミーティングやスーパービジョンを高頻度で行い、個別事情に応えられる業務シフトで対応していました。スタッフ負担に寄り添える仕組みをスタッフと一緒に検討する必要があるかもしれません。特に、ちょっとした時間で相談できる環境整備が必要なのかもしれません。総合的な評価は、認知症ケアを中心に医療と介護の連携が図れていました。これからも地域に根ざした事業所として頑張ってください。

〒891-0151 鹿児島県鹿児島市光山 2丁目 3-56
特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所
社会福祉学博士　岩　崎　房　子